

後置詞「について」と格助辞「を」

林 淳子

はじめに

本稿は日本語において語と語をむすびつけて文をつむぎ出す機能語として、後置詞と格助辞に注目する。なお、本稿では後置詞を次のように定義する。¹

「後置詞とは、名詞の格を支配しながら、これと組み合わせあって、その名詞とほかの語を関係づける機能語である。後置詞句は名詞の格の形とこれを支配する後置詞の組み合わせである。」

いわゆる後置詞の説明として、格では表しきれない語と語の関係を分析的な形式によって鮮明に描き出すのがその存在意義のように言われることがある²。それは確かに後置詞の特徴の一側面をとらえているが、後置詞は単なる補助でしかないのか、後置詞と格助辞はどのような関係にあるのか、それを探るのが本稿の目的である。

本稿ではこの問題に取り組むために、に格の名詞をとる後置詞「について」と格助辞「を」を取り上げる。たとえば「平和について考える」の「について」も、「平和を考える」の「を」も、動詞と、その動詞の表す事態を構成する物を表す名詞とをむすびつける役割を担う。これらの作るむすびつきに違いはあるのだろうか。本稿ではまず、「について」の用法と性格を研究し、「について」と「を」が両方用いられる場合、どちらかしか使えない場合を調べることによって、二者の機能語としての性質の違いを考察する。

(1) 後置詞「について」の用法と性格

後置詞「について」が動詞と名詞をむすびつけるとき、動詞はその表す活動が言語活動や思考活動にかかわるものや認識、態度を表すものに限定されている。また、同じ活動を表す動詞と名詞をむすびつけるとしても、そのむすびつきは一通りではない。このような観点から「について」が格のように動詞と名詞をむすびつける場合を分類すると以下のようなようになる。①～⑩は動詞の表す動作の種類、A、Bは動詞と名詞のむすびつきの種類である。ただし、動詞と名詞のむすびつきの分類A、Bは、後述のように①～⑩のすべ

ての種類の動詞に存在するわけではない。

①言語活動

- A. 題材 最近の会社の営業活動について早口に喋りだした。(新橋)
B. 対象 登場してくる力士や呼出しや行司の顔立ち、態度について、あからさまな悪口を言った。(楡家)

②問答

- A. 題材 花子とふたりだけで山について語り合ってみたいと思っていた。(孤高)

③報道・報告

- A. 題材 日本人の生活について少しお知らせしましょう。(沈黙)

④教授

- A. 題材 立木勲平は主としてディーゼルエンジンについて講義をした。(孤高)

⑤思考活動

- A. 題材 私は未来のことについて思い、(ティファニー)
B. 対象 そのひとつの寝息を吐いている宮村について、加藤はさらに多くのことを考えねばならなかった。(孤高)

⑥勉強・研究

- A. 題材 志方は女権や女子職業についてまで勉強してきた形跡がある。(花埋み)

⑦調査

- B. 対象 父は、勝沼について調べたのだと言いました。(錦繡)

⑧理解

- ・ 生についてまだよく分かってもないのに、(山月記)

⑨感情

- ・ ひとは未来について感傷することができぬ。(人生論)

⑩知識

- ・ 申は私の日本での職業についてよく知っているようだった。(一瞬)

⑩態度

- A. 題材 彼は、こんどの休暇について、ひどく秘密めかした態度をとり、(砂の女)
- B. 対象 おれは田口みやときみとの結婚について反対してやろうと思って (孤高)

上の①～⑩は動詞の表す行為に基づく分類であるが、これらの行為はすべて具体物にはたらきかけて変化を引き起こす物理的な活動ではなく、人間の精神活動である。言語活動や思考活動がその中心であり、②～④は言語活動がその行為の成立に不可欠だという点で言語活動のバリエーション、⑥～⑦は思考を用いて行う点で思考活動のバリエーションと考えられる。⑧～⑩も精神活動であることは変わらないが、言語を繰り出し、思考をめぐらすなどの内的な行動すら含まず、実際の行動をなら伴わない点で①～⑦に比べて行為としての要素は薄い。つまりこれらは、非常にかかわりの、態度的である。なお、①～④の言語活動を表す述語には「悪口を言う」「講義をする」のように動詞よりも名詞が実質的に活動を表しているものがある。この場合「～について」後置詞句は動詞にむすびつくというよりもむしろ、これらの機能動詞の結合全体とむすびついている³⁴。

大まかにいえば、後置詞「について」によってこれらの動詞とむすびつく名詞が表すのは、①～⑩の活動の成立に際して活動主体が強く意識することがらである。後置詞「について」が示す、このことがらの行為との関係の仕方は大きく二つに分かれる。すなわち、A 題材、B 対象の二つである。

A 題材は活動を行うにあたって、活動主体の頭のなかでソースとして意識されていることがらである。意識の中心に浮かび上がった、もしくは持ち込まれた、このことがらを頭のなかで眺め回しながら、言語をつむぎ出したり、思考をめぐらせたりするのである。つまりは材料なのである。

一方、B 対象は活動主体が言語や思考を向ける先である。①～⑩の活動はすべて具体的な客体的な変化を伴わないが、そのなかでも言語や思考を投げかけるという意味では行為性、はたらきかけ性が高い活動において、「について」の示すことがらがその活動が向けられる先である場合、対象のむすびつきになる。「について」で言語活動や思考活動の対象が示される場合、その活動によってつむぎ出された言語や思考の内容は格名詞で示されることが多い。を格名詞の存在によって「～について」後置詞句が対象を示すのに特化している場合、「について」で示される名詞が対象であることが分かりやすいが、そうでない場合は対象も題材に近く感じられることがある。

特に⑧～⑩の態度的な活動ははたらきかけ性が非常に低く、何を材料にしてどのような言語や思考を、どこに向ける、というような分析ができない活動である。そこでは

「ついて」で示されることがらは、そのようなかわりを生む題材でありかつ、かわる対象であるとも言え、どちらかに分類することはできない。ただし、⑩の二例目のように明確に対象をもつ態度もある。

このように、活動主体が活動において頭のなかで材料として、対象として意識していることがらを表すのが後置詞「ついて」の役割である¹⁾。①～⑩のような何らかの認識に基づく、かわり的な活動において主体は具体物との物理的な関係をもたないが、意識を向けるという関係の仕方はこれらの活動の成立に不可欠な関係であるといえる。よって後置詞「ついて」は、動詞の必須要素をあらわす、いわば格的性格があるといえる。これが「平和について論じる」と「平和を論じる」の両方が言えることの理由なのである。

(2) 後置詞「ついて」と格助辞「を」の置き換え

しかし、「平和について論じる」と「平和を論じる」の両方が言えるといっても、後置詞「ついて」と格助辞「を」はすべての場合に置き換えが可能なわけではない。さらに、格助辞「を」が持つ用法は幅広く、その一部が後置詞「ついて」の用法に重なるにすぎない。そこで、後置詞「ついて」と格助辞「を」との比較を通して後置詞「ついて」の性格を明確にする。具体的には動詞を固定して、むすびつきや名詞の種類による後置詞「ついて」と格助辞「を」の置き換えの許容度を見てみる。固定する動詞としては、上の①～⑩の動詞分類のうち、精神活動の典型である①言語活動と⑤思考活動に属する動詞をいくつかあげる。また、これらの動詞のB対象の用法では、「～について」後置詞句とを格名詞が共起しているため置換操作を行えないことから、A題材用法のみを扱う。

括弧内は筆者による置き換えであり、*はその置き換えを行うと文が非文法的になることを表す。

①言語活動をあらわす動詞

a. 「～について語る」と「～を語る」の比較

- ・ 内藤はオレンジジュースを呑みながら熱心にインドネシアについて (*を) 語った。
(一瞬)
- ・ おまけに彼が、多少でも自分の絵と類似のあるような画家—たとえばセザンヌとか、ヴァン・ゴッホとかいった連中—について (*を) 語るのを聞いたことは一度もな

い。(月)

具体物や人をコト化し、題材として提示するのは「を」にはない「について」の機能である。

- ・ 人は、あまりにも軽々しく美について語る、(月)
- ・ 私は謎が謎としてしか見えない立場に自己を限定して過去を語る。(こころ)

抽象概念を表す名詞は、「ついで」と「を」のどちらを介しても言語活動の題材のむすびつきを作る。

- ・ 大部分が古典物語とおなじ昔話を(*について)語る記述の仕方を探っている。
(遠野)

- ・ ただ、北海道の雄大な景色や、寒さのことを(*について)語るだけである(塩狩)

「昔話」のように「語る」の内容を表す名詞や、「～こと」で終わる名詞のように既にコト化して、内容と題材を同一化して表す名詞には、「ついで」は使えない。コト化の機能をもつ「ついで」を用いると二重にコト化が起こり、過剰な感じがするためと考えられる。

b. 「～について話す」と「～を話す」

- ・ 表情をいくらか曇らせたのは、彼女の家族について(*を)話したときだった。
(一瞬)

- ・ 料理を待つあいだ、私たちは理屈について(*を)話しつづけた。(一瞬)
- ・ 彼は気分がよくなったらしく、帰りのバスのことを話した。(異邦人)

具体物や人を表す名詞を言語活動の題材として述べるときは、「語る」と同様、「ついで」しか使えない。を格の形で「話す」とむすびついて題材を表すためには「～のこと」でコト化する必要がある。

- ・ ある計画について(*を)話したいのだと主人はいった。(異邦人)
- ・ 利兵衛が逃走計画を話したとき、(冬)

概念名詞を題材として提示する場合は、「ついで」と「を」のどちらでもよい「語る」のときとは異なり、「ついで」でないといけない。を格の形で「話す」とむすびつく概念名詞は「逃走計画」のように個別具体化されたことがらであり、このとき「逃走計画を話す」というむすびつきは「話す」活動とその内容を表す。一方「逃走計画について話す」といえば、「逃走計画」は単なる内容としてひとまとめにされるのではなく、題

材でありかつ内容となり、重層的になる。

- ・ 鉄吉は英語を（*について）話すのが得手ではないし、（楡家）
- ・ 黒島先任参謀と宇垣参謀長に大体のことを（*について）話したあと、（山本）コト化の二重を避けることに関しては、「語る」の場合と同様である。同属目的語や「～のこと」によって既にコト化された名詞には「ついて」は使われない。

c. 「～についてきく」と「～をきく」

- ・ この数日間ストリックランドについて（*を）聞きたいいろんな話が、（月）
- ・ みな阿片について（*を）聞かれたとのことだった。（人民）

名詞が具体物・抽象物にかかわらず、「きく」と題材のむすびつきを作るには「ついて」しか使えない。抽象概念を表す名詞でも、を格の形で題材を表すことができない点で「語る」「話す」と異なる。これは「きく」が感覚活動の意味ももつ動詞なので、言語活動とその題材を表すには「ついて」でそのことを明示する必要があるためと考えられる。

- ・ 自分の心臓の鼓動を（*について）きくことができるまでは、（ティファニー）
- ・ 一生に一度ぐらい、おれの頼みを（*について）きいてくれてもいいんじゃないかねえのか、（雁）

反対に「きく」の意味が言語活動としての「きく」や質問の意味の「きく」からずれて、感性的な意味や慣用句のなかでの決まった意味になると「ついて」は使えない。ここから、「ついて」が作るのは言語活動において活動主体の内部で意識されることがらを表すむすびつきであることが改めて確認される。

d. 「～について書く」と「～を書く」

- ・ その絵について（*を）書いたのは、四十四章においてであるが、（砂の上）
- ・ 私はあと二人ほど私の信徒たちについて（*を）書きましょう。（沈黙）
- ・ 愛だとか、殺人だとか、駆落だとか、秘密だとかいうことを書くなんて、ばかげたことだったわ。（赤毛）

「書く」も「きく」と同様、言語活動の題材を表すには「ついて」の必要性が高い。抽象概念ですら「～こと」をつけてコト化しなければ、を格の形で題材を表すことはできない。

- ・ 手紙を（*について）書くとなると、いつも柄になく子供っぽい文章しか書けない男である。（あすなろ）

「手紙」のように内容を規定する名詞とむすびついて、「書く」の意味が内的な言語活動からずれると「ついて」の許容度が下がる。動作性の高い「書く」には、活動において中心的な、意識されることがらを表す「ついて」で内容を表すことはできないのである。

以上、言語活動を表す動詞と名詞をむすびつける後置詞「ついて」と格助辞「を」を比べると、「ついて」がコト化の機能をもつこと、このコト化の機能がこの二者の置換許容度を左右することが分かる。すなわち、具体物や人など、題材として表すにはコト化が必要な場合は「ついて」の必要性が高く「を」では不可である。一方で、既にコト化された名詞とむすびつく場合や、動詞が精神活動としての言語活動を表していない場合はむしろ「ついて」の許容度は低くなる。

⑤思考活動を表す動詞

a. 「～について考える」と「～を考える」

- ・ それから僕は目を閉じたまま図書館の女の子について考えてみた。（世界）
- ・ 吟子のことを考えるうちに樹の周りのほとんどを切り尽し、慌てたこともあった。（花埋み）
- ・ 花子を考えると、なにか胸が鳴るのである。（孤高）

具体名詞と「考える」がむすびつくとき、「ついて」でくっつけるか、を格の形をとるかによって意味合いが異なってくる。「ついて」でくっつけば、思考活動の題材としてその具体物や人を示すことになるが、を格の形でむすべば、目に見える映像として想像する意味合いになる。を格の形で思考活動の題材を示すには「～のこと」でコト化することが必要である。

- ・ 時間について考えると私の頭は痛んだ。（世界）
- ・ 時間を考えると、今から電話するのは失礼にあたる。（作例）
- ・ しかしわたくし自身、祖母も急死、父も急死という体験から、死について考えるようになり、（塩狩）
- ・ 青年たちの中には、戦勝にわく世人とは別に、真剣に生死を考える者も出てきた。（塩狩）

抽象名詞と「考える」がむすびつくときも、「ついて」とを格の形とでは意味合いが異なる。「ついて」でむすべば、思考活動の題材を表すが、を格の形でむすべば「時間を考える」のように考慮の対象を表したり、「生死を考える」のように志向・計画の内容を表す。つまり、を格の形でむすぶ場合、「考える」の意味は思考活動からはずれてきている。

- ・ 財布の中味を考えると、その種の宿に泊まることは出来ませんでした。(錦織)
また、具体物を表す名詞とむすびつくときでも、考慮の対象を表すことがある。

上記をまとめると、動詞「考える」と名詞をむすびつけるとき、「ついて」はどんな名詞でも思考活動の題材として表すが、を格の形をとると映像として想像する対象や考慮の対象、志向・計画の内容を表すという使い分けが起きていることが分かる。

b. 「～について思う」と「～を思う」

- ・ いったい妙子がわたしについて(を) どう思っているのかさっぱり判らず、(革手)
- ・ こんな道を見ていると私はなぜか、人生を(について) 思い、悲しくなりますよ。(沈黙)

「思う」は「考える」よりも「を」の許容度が高く、具体名詞でも抽象名詞でも、「ついて」だけではなく「を」でも思考活動の題材として表すことができる。

- ・ その頃から御嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかったのです。(ころ)
- ・ 「山本の将来を思っ、辛いだろうが別れてやってくれ」(山本)
- ・ なぜ、私はこういう時、別の男の顔を思うのか。(沈黙)

しかし、名詞がを格の形をとって「思う」とむすびつくときは、必ずしも思考活動の題材を表すとは限らない。思慕や憂慮のように態度的な意味を帯びる「思う」の対象や、映像として想像する対象を表すこともある。この点が、必ず思考活動の対象を表す「ついて」との大きく異なる点である。

以上から、思考活動を表す動詞と名詞をむすびつけるとき、「ついて」は必ず思考活動の題材を表すことがわかる。「思う」の場合はを格の形でも思考活動の題材を表すことが可能だが、「考える」の場合は「～のこと」で名詞をコト化しなければならない。これは動詞の語彙的性格の違いによると思われる。すなわち、二者を比べると「思う」

がかかわり的なのに対し、「考える」はより行為としての要素が強い。このため「考える」は「を」でただ格関係を示しただけでは思考とその題材のむすびつきを表せない。また、名詞がを格の形で「考える」「思う」とむすびつくとき、思考活動とその題材以外のむすびつきを表すこともある。

こうして①言語活動を表す動詞4つ（「語る」「話す」「聞く」「書く」と⑤思考活動を表す動詞2つ（「考える」「思う」）に動詞を固定して、後置詞「ついて」と格助辞「を」の使用範囲の重なりと違いを、名詞の種類や作るむすびつきの種類という観点から見た。ここから言えることは、後置詞「ついて」は格助詞「を」と異なり、言語活動や思考活動の題材を表す用法しか見られないが、その反面、を格の形では言語活動や思考活動の題材として表せないような名詞（具体名詞など）までもコト化して題材として表す機能をもつということである。を格の形で具体名詞を題材として表すには「のこ」とコト化することが必要なは上で見たとおりだが、「ついて」は意味的・機能的に「のこ」の部分まで内包していると言える。

「ついて」はこのようにコト化の機能をもつので、かかわり的な活動においてその活動の遂行に強く関係するものとして活動主体に認識されることがらを示す、という非常に限られた範囲において、しかしそれゆえに名詞の種類を限ることなく用いられる。これが後置詞「ついて」の格助辞「を」には見られない特徴である。

(3) 「ついて」と「のこを」

第二節では用例中の「ついて」と「を」を置き換えてみた。その結果、格助辞「を」には見られない後置詞「ついて」の用法として、を格の形では言語活動や思考活動の題材として表すことができない具体物や人を表す名詞までも「ついて」であれば題材として示すことが可能であることが分かった。さらに、これらの名詞がを格の形で言語活動や思考活動の題材として表されるときは「～のこを」の形をとってコト化されなければならないことから、「ついて」は「のこ」を内包している、とした。

しかし、「のこを」で置き換えが可能だからといって本当に「ついて」は「のこ」と同様の意味機能を内包していると言えるのだろうか。また、「ついて」が「のこ」と同様の意味機能を内包しているとすれば、抽象名詞のようにを格の形でも題材として表すことができる名詞とむすびつくときの「ついて」も必ず「のこ」の意味機能を内包しているはずであり、そのとき「抽象名詞+を」と「抽象名詞+について」が表現する意味は異なるのだろうか。

「ついて」は抽象名詞であれ、具体名詞であれ、形式名詞「こと」の付加を必要とす

ることなく、言語活動や思考活動を表す動詞とその活動の題材となることがらとをむすびつける。ということは、名詞の種類と動詞との相性にかかわらず題材のむすびつきを作り上げる力を「ついて」が持っているということである。「ついて」が「のこと」の意味機能を内包しているといえるのは、あくまで「(名詞)のことを」と比べて足し算引き算した結果であって、抽象名詞とむすびつくときにその働きが行われているのではない。

一方で「を」は、抽象名詞ならばそのまま題材として表せるが、具体名詞は「のこと」でコト化してからでないと題材として動詞とむすぶことができない。これは「を」が格助辞であり、論理的な格関係をむすぶのがその本質的な働きであることを考えれば自然である。すなわち、「を」の役割のなかに「題材」のような意味的なものは含まれておらず、動詞とその必須要素との格関係を示すのみなのである。そこで、抽象名詞のようにもとから題材としての資質を備えている名詞は「を」で格関係をむすんだだけで題材として示すことが可能だが、具体名詞のように題材となるための概念としての資質に乏しいものは「のこと」でコト化されてからでないと題材として示すことができないのである。同様に、動詞の語彙的意味によって「のこと」の必要性に違いがある（たとえば「思う」と「考える」）のも「を」で論理的格関係を示すだけで題材のむすびつきを表せるかが異なることによる²⁴。

このように同じく機能語でありながら、意味を含む度合いが異なるものとして後置詞「ついて」と格助辞「を」の両方があるからこそ、「平和について考える」と「平和を考える」の両方の形が生まれるのであり、これらは「ついて」「を」のそれぞれの性格に基づいてもつ用法の広がり重なる部分に位置しているのである。

まとめ

本稿では後置詞「ついて」の用法を整理し、同じく機能語である格助辞「を」と比較することによってその性格を考察した。その結果、「ついて」と「を」は部分的に用法を重ねているが、「を」は格助辞として論理的関係を組み立てて示すものであり、「ついて」は題材という意味的なものまで含んでむすびつきを作るという点に両者の違いを見いだした。

今後は、このような違いが後置詞と格助辞の全体に見られるものか、についてさまざまな後置詞をとりあげ観察したい。また、「ついて」を「を」以外の格助詞と比較することも必要かと思われる。

- i 本稿で後置詞とよぶものを、複合格助詞、複合助辞とよぶ場合も見られる。
- ii 佐藤尚子 (1990) は、英語の前置詞と日本語の後置詞の共通点として、特定の格を支配して、格の形では十分にあらわせない名詞と他の単語との関係をあらわすはたらきをしていることに加え、その誕生・発達の要因に「より精密な表現への欲求」があることを挙げている。
- iii 村木新次郎 1991 では、実質的な意味を名詞にあずけてみずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞を機能動詞とし、機能動詞と動作性名詞の語結合を機能動詞結合と呼ぶ。また、機能動詞の特徴として、一語動詞との交替(「においがする」⇔「におう」)、語結合が格を支配することがあげられている。
- iv しかし一方で、言語や思考を生み出す材料となるもの(A)、生み出されたものが向けられている先(B)の両方が「ついて」で動詞とむすばれるのは後置詞の存在意義とされる表現の精密さに一致しない感じがする。この点に関しては今後の課題としたい。
- v 日高水穂 2006 は「こと」が話し言葉において新しい格表示の機能を獲得していることを用例やアンケート調査から述べたものであり、「こと」は語彙的な意味を付加する要素から、格表示という文法的な機能を担うものへと文法化を進めているとする。そして、その格表示の用法をA前接名詞の「情報内容」を意味する用法と、B前接名詞の「内面的属性」を意味する用法の二つに分けている。
- vi 柏崎 2007 はこのような観点から、「について」で取り上げた対象の名詞をヲ格の必須補語として取り込む際に「～のことを/の件を」または「を」のそれぞれの形の可否を、名詞と動詞の組み合わせ別に詳しく検討したものである。

なお、本文中の用例は『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』のうち、以下の作品によった。以下にその作品名と作者名、本文中での省略表記を示す。

- ・新橋島森口青春篇 椎名誠 (新橋)
- ・楡家の人びと 北杜夫 (楡家)
- ・孤高の人 新田次郎 (孤高)
- ・沈黙の春 レイチェル・カーソン (沈黙)
- ・ティファニーで朝食を カポーティ (ティファニー)
- ・花埋み 渡辺淳一 (花埋み)
- ・錦繡 宮本輝 (錦繡)
- ・李陵・山月記 中島敦 (山月記)
- ・人生論ノート 三木清 (人生論)
- ・一瞬の夏 沢木耕太郎 (一瞬)
- ・砂の女 阿部公房 (砂の女)
- ・月と六ペンス モーム (月)
- ・こころ 夏目漱石 (こころ)
- ・遠野物語 柳田国男 (遠野)
- ・塩狩峠 三浦綾子 (塩狩)
- ・異邦人 カミュ (異邦人)
- ・冬の旅 立原正秋 (冬)
- ・山本五十六 阿川弘之 (山本)
- ・人民は弱し 官吏は強し 星新一 (人民)
- ・雁の寺・越前竹人形 水上勉 (雁)
- ・砂の上の植物群 吉行淳之介 (砂の上)
- ・あすなる物語 井上靖 (あすなる)
- ・世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド 村上春樹 (世界)
- ・葦手 石川淳 (葦手)

【参考文献】

- ・柏崎雅世 (2007) 「テーマを示す複合助詞「について」と格助詞「を」」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集33』
- ・佐藤尚子 (1989) 「現代日本語の後置詞の機能－「～について」と「～に対して」を例として－」

『佐賀大國文26』

- ・佐藤尚子 (1990) 「後置詞と前置詞 名詞の格の周辺」『国文学 解釈と鑑賞55-1』至文堂
- ・塚本秀樹 (1991) 「日本語における複合格助詞について」『日本語学10-3』明治書院
- ・日高水穂 (2006) 「『のこと』の機能—話しことばにおける新しい格表示—」『日本語文法の新地平1 形態・叙述内容編』益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 くろしお出版
- ・三井正孝 (2005) 「単純格助詞と置換不可能なニツイテ格の構文的性質—文構造上の位置および連体成分化の考察—」『論理的な日本語表現を支える複合辞形式に関する記述的総合研究』研究代表者 藤田保幸
- ・村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- ・Barry, J. Blake (2001) “Case” Second edition Cambridge Textbooks in Linguistics

(はやし じゅんこ 大学院人文社会系研究科 修士課程1年)